

桑名前  
修遺書

志

如

ら

み

廣瀬蒙齋先生著

全

桑名前修遺書編纂緒言

白河文學ノ盛ナル生等夙ニ之レヲ聞ク然レモ其跡邈焉タリ其存スルモノ幾許ゾ歳月ノ經過ハ之レヲ朽腐ニ属セシメ之レヲ埋滅ニ歸セシム此生等ノ愛惜措ク能ハザル所ナリ抑モ亦タ後進ノ因テ以テ感觀興起スベキモノ同郷先覺者ノ遺稿ニ如クモノナカルベシ生等菲薄ヲ顧ミシテ敢テ妄リニ諸先覺ノ遺稿ヲ編集セントスルモノハ今ニシテ之レカ保存ノ法ヲ講セサレバ今存スルモノト雖モ終ニ復得ヘカラザルニ至ランコトヲ恐ルレバナリ是レ一ハ以テ同郷先覺者ノ名聲ヲ不朽ニ傳ヘ一ハ以テ後進獎勵ノ資ニ供セント欲スレバナリ希クハ同志ノ士贊助セラレントヲ

規約ヲ定ムル左ノ如シ

- 一 諸大家ノ遺稿ニテ詩文ハ勿論其他隨筆雜錄逸事等一切採集シ得ベキ限リヲ採集シ以テ同志ニ分ツ
  - 一 毎月一回十五日ニ發行スル
  - 一 但シ採集及經費ノ都合ニ依リ紙數ニ多寡アルベシト雖モ大概半紙判十二行廿五字詰廿枚内外トス
  - 一 月費金十錢前金タルベキ
  - 一 材料ハ可成的多カラント要ス故ニ當本部ニ於テ未タ所有セザル材料送附ノ方ニハ其冊子一部ヲ呈ス
- 附白
- 一 全部終結ノ上ハ各先生ノ詩文ハ各別ニ之レヲ卷冊トナシ保存シ能フベキ方法ニ從テヲ願フスベシ
  - 一 一冊ノ紙數ハ豫メ期シ難シト雖モ同志者ノ増減ニ因テ紙數モ亦増減スベシ從テ成功期限ニ長短ノ差ヲ生スベシ依テ各位ノ熱心ニ同志者ヲ勸誘セラレントヲ希望ス
  - 一 校正ハ秋山先生ニ囑托シテ承諾ヲ得タリ

常ニ見聞ぬる事も老ぬるに隨てわすれぬれハ今此巻よかきと老ぬ山川に風のあけさる志からみハ色ふかき錦なるべしこの朽残る落葉をたか見とくむへきたくわか遺忘よ備ふるのみ

文化十三年長月初の二日

蒙翁

志からみ

一 備中の國吉備の宮始て建立したる時の古瓦を寛政四年の春掘得しといふ

一 正之公保科家の御養子とあり給ひ御引うつりのとき保科家より騎馬百人御迎よまいたり此比みあわらよて鬘を結たりとかの御家の御記録にありしとそけよ此御分限にて百騎も御迎に出るよは質素の風ならてハ行ひかたかるべし

一 與田豊前守殿御膳番を勧めらまじとき時節過なる鶴を御料理ありてそまを御試みにとて出しけれハわを御馬さきにて討死する命はあれども時ならぬものをくらゐ毒のために捨る命ハなして御試

みせさりしとぞその事 有徳公の御聽に入しかやうて御目付に御  
取立あり其後年をへて御執政田沼侯の御別業へ 御臺所御成の事  
願それしか異儀なくその御催しありしに豊前殿獨少しも承引あき  
によりて御沙汰やみとありぬ名君の御目鑑の人ハ格別なりとそ  
比世擧て賞し奉りしよし栗山先生の御物語なり  
一石川丈山翁常にいはれしハ忠義と見たらば上意もかまふとむ  
是も先生の御ものかたりなり  
一伊達正宗君御工夫の上よき甲冑を拵ひ給ひ御自慢心にて片倉小十  
郎へ見せ給ひしに小十郎拜見して申けるはおしき事ハ御目の所  
かあきたりと申上られしか正宗君其具足を御終身着給ふ事なかり  
しと平山子龍かたりぬ  
一齋藤三太夫殿へ行しときあみのたちといふ短刀の製作を見たり衣  
笠内大臣の御歌に何事をおもふへしともまられしなあみのうち  
も刀やばある

一野村筑前といふ近江士のあらはせし撰士篇に一番鎗の條に世の中  
に主はひとり我ひとりと心ゆる勇氣のもの一番鎗いるとみへた  
り

一岩城の上田といふ所に上田隆廣の墟あり上春寺といふ寺は上田家  
の開基也上田の迹へ梶原美濃といふ人來り領せしか隆勝寺といふ  
寺ハ梶原の開基なりといふ梶原美濃は太田三樂の子なり常陸口に  
その事詳なり岩城の旗下となりぬ今會津の藩士に梶原某といふ  
ハその孫裔なりとぞ

一岩前郡林城村 正親町帝の勅額賜りし寺ありこゝに古文書數多  
も傳ふといふ

一岩城の濱にて初てすおどり得たる鯉をおんねへといふ方言なり御  
費のなまりあるべし初穂を神にそなへし名残にや

一老農かいふ苗をうゆるには雨よて寒きかよく麥ハあつきかよきと  
て俚諺よ布子田よそたか麥といふ

一今相馬侯の封内行方宇多郡は和名抄をとしめ古郡の名を志るしたる書ともよ見あたらす昔は信夫郡の内よて信夫の浦など古歌によみしは此二郡の海邊をさしたるからんか今の信夫郡は海よりなる地おしさて相馬侯の御先祖下總より封をこゝへ移し給ひしときより行方宇多の名おこりしよや今も此御城下をさして相馬と唱ふまど其地に行て問へば相馬といふ所おし侯下總の相馬よりこゝに來給ひしゆへ今かくい云成へし

一岩城平の城主内藤左京亮義槩ハ賢明の聞へりて民のため種々の良法を舉行し今に餘風の残りし事有とそ風山念佛とて今に秋七月比毎年大勢あつまりて念佛唱ふる事あり此侯のよめ後世を祈るありと磐風山ハ別號あり岩城風土記と云一卷ハ此侯の時代儒臣の撰みしものと云善昌寺といふ寺に侯の木像一軀を安置す予親しく調を

一大和物語に仁明帝の御宇奥州ハ夷狄やくもすれハ侵すによりて親

王を下しをかれしよしみえとり今の宮城郡ハ其居給ふ地にてかく名にハおこるならんかど石川利兵衛といふものかたりぬ利兵衛ハ平の町の豪富家あり

一筑波山の下ハ國養蠶社あり大和物語人丸の歌ハ筑波根の新桑まゆの絹ハあれと君か淨衣云々の歌あれば養蠶の社も古き事なりと利兵衛かといふ

一かどりの村眞言宗圓通寺といふ寺ハ日野中納言雅宣卿謫居の地と土人言傳ふ

一菊田郡關田村の地内に穴居の跡あり  
一水戸御領分三十六萬石を四ツに分け南部太田郡松岡久慈郡多賀郡といふ私に置れしにや昔の郡名にはいまた見ず

一太田の城主中山備中守殿大塚の手綱の舊墟を取立て移り給はんと  
いふ文化三年予遊行の時普請最中なりき  
一大塚村の東にあたり車村といふあり古壘あり車丹波の古城ありと

そ

一多賀郡花園明神大社なり多賀郡ハ奥州境にて山多く地高し多賀ハ  
高きゆへなるへし奥州の古郡名の高野郡も此多賀郡に同じきたる  
地なり高野ハ今は奥州の内よなし予か五十四郡考にくらし  
一常州袋田の瀑布高さ三十丈計三段に落ぬ  
一久慈郡の内に陰陽山といふ山ハ義公の名付給ひしとそ山頂に大き  
さ二丈餘をかりの男女の二石あり會津南山塔の廻つりの陽備後國  
路傍の陽大井川より出る陽などハ我も見たり皆天造自然の物あり  
天地の間萬物をそたてゝ其餘暇にハかゝるものまで形狀の妙を極  
め給ふもおかし  
一黒羽の壘北四丁計よして古き土居の跡ありかまへ場といふ伊王野  
氏出張の跡といひ傳ふ伊王野氏繁昌の時ハ今の黒羽町まいたと云  
所の片側までも伊王野封内たりしと也同所の北五斗詩といふ小名  
の地ハ薬師の像あり仁平年中の銘あり

一黒羽の藩士矢野角助先祖ハ小山家の舊臣なり小山落城之時立退雲  
巖寺の住僧ハ叔父なればこゝに來りしを黒羽より召れしといふ  
今に小山の城跡に矢野曲輪の小名も残りたれば小山にては大臣の  
列なるへし我藩山中久右衛門も小山の舊臣よて同姓なりしとて近  
きころ小山と姓氏を改めぬ  
一伊王野信濃守の家老鮎瀬彌五郎今よ伊王野に居て名主を勤む先  
祖は五月女坂の合戦に宇都宮俊綱をうつ又關山の合戦よ功を顯は  
しぬ然るにこの兩度の軍戦年數いたく隔りぬれば彌五郎一人よそ  
あるへからす必いまひとりの家老小山田藤助といふものなるへし  
黒羽家中に今も子孫あり  
一長崎へ來る清朝船の水主を工社又は目侶といふ近き比伊豆下田へ  
來りたる南京舟にも目侶人乗といふ目侶工社何といふ名義にや解  
しかさし

一口ハルトミスといふ西洋天文の書其術簡にして要を得たるものな

りとせ

- 一長崎に朱子の鑄像を藏するもの有其像の肩に陰識に昔大明成化四年梁昶于金陵請鑄侍奉と彫り
- 一肥後國合志郡牧村伊勢神明十月十五日祭神を行ふその日社内をかりひいかなる晴天にても毎年雨ふらぬ事なすとそ
- 一高砂の尉婆の木像いかなる故にや山城國御所内村にありしを寛政八年に高砂に遷し本に復しぬ
- 一婦人の産を汚とする事唐よては漢の蔡世か靈帝へ奉る書にみゆ妻妾産者齊則不入側室之門とあり
- 一長崎唐寺四ヶ寺あり福濟寺よ書畫多し仇實父か畫桃李園獨樂園西園雅集金谷園の一幅密畫あり書は陳彭年あり跋よ四園名勝也仇實父名筆也彭隆池名書也是此一卷可稱三絶允宜寶諸萬曆改元冬十一月觀并識於弁園瑯琊王世貞とあり又別に渡海羅漢の面贊あり尤名品なり御代官高木作右衛門殿の宅へ行しとき大塔宮の腹巻ありと

て緋威の腹巻を出して見せらるけに古色あるもの也

- 一肥後の菊池郡の隈府ハ一郡中の親村にて村の側に菊の池とて四席まぐへき程の大きさの池あり清水盛よ湧出ぬ昔その水の湧る形ち中高く泡立て菊花の盛にさけるあまよくなれば菊池の名はおこりなりと櫻觀光寺よ菊池代々の墳墓あり皆小さき五輪よて誰々といふ事辨しかたぐ大なる楠の下は武光の墳なる事疑ひなしとて近き頃土地の舊民龜趺の方碑をさつ銘を藪茂次郎よ乞ふ觀光寺の後の山は城跡よてことくく鋤て畠となしたれとも方三四丈程鋤もせて大なる礎のある地は土人履をはかて登るあり是を征西の官の御殿の跡といふ又其山下に古き櫻あり官の手挿し給ひし木あり今も花多くさくといふ其側の畠よ學校畠犬追物場ふんと云小名のこりたり學校の有し時の聖像とて裏に文永何年とか書たる掛物を村よ持傳へたり予も見しか古色掬をへきものあり委敷事はわかれしか文永の年號のみ覺ぬ

一阿波國鳴門を一覽して濱傳ひ讃州へおもむきしその日は七月二十五日あり秋陽沙をあふり煎るかどくまおも沙ふかく足の甲を没す土人に道は里數をとへは何里むくれの何といふ村へ出ると答ふ道行ことをむくるといふの方言あるへしもし沙ふるく足のむくる故よや

一楠三卷の書といふもの偽作疑ひおしまつあやまりの一端をいばる卷の末に建武三年五月從五位河内守橘正成とあるす南朝にては建武三年二月廿九日改元にて延元といふ北朝の年號を用ひらるる所謂まじきたる事諸書に歴然たり正成公北朝の年號を用ひらるる所謂まじ一今川了俊の水の方圓の器にまたかひ人の善惡の友によるといふの唐太宗の文に古人云君猶器也民猶水也方圓在於器不在於水の語に本つられしなるべし

一我母の成合氏なり母の母の畑田氏なり其父宗益君の儼然たる武夫なりしか醫道にくましけれはとて一代限りの醫師に命せられ給

ひ明日命の下らんとする宵に組頭へ御うけに行給ふとて城門のあたりよて野村増右衛門に逢給ひしに増右衛門のいひしはあすは醫師の命あるへし御請いたすへからす我よきやうに取あし遣すへしといひしを宗益君は軽く承り給ひぬ我其時野村かいひしは隨はる眷属までも縁坐せらるへきと子孫らよかたり給ひしと母君のいひ給ひき

一我年わかきとき七十よあまれる井上次郎大夫といふ翁ありけり天姓奇人也武術を多くなしおみ火矢を常よ持へ置て葛籠よひとつ入てあり時々一二根ツ、打放せば必そのあとを補ひをきぬ

一河村遊山翁そのおみ御横目勤めたるとき今の老公世子よて安永七年日光御社参のとき寛光君の御名代として初て白川へ來り給ひしその時誰やらん御家中の人物の事問給ひしか遊山答へ奉りて申けるは人物の善惡は外人よむかひ評論いたすまじき旨神文仕りたる上は大殿君の外世子にいままとも御請は仕がなき旨申上



けると其朴直嚴格なるを愛し給ふゆへにや追々御登庸ありて御月番次席迄にすくみぬ遊山の家代々御物頭御用人かどを勤め祿三百石ありか五十石の加秩賜りぬ

一人の骨地中に年久しくあれはもし長大にあるものにてやいと疑はし美濃國金勝山にて石窟をほりあてたるか壇の上に大なる髑髏をのせ劔にて耳の脇よりむかふの耳まで貫きさり其大きき平人に三倍せりといふ事西遊のとききくぬ又備中の吉備公の古墳より大なる隨の骨を掘得たり岡田侯伊藤君みづから我をぬにくらへ給ひしに三寸計も長かりしと彦仙臺柴田郡に古骨山といふあり銅を掘とて人骨を掘出せしに長さ一丈に餘れり

一村上侯内藤君にて越後國三嶋郡圓城寺瀉を山をうかちて水を海へそくき出すへき事十餘年をへて文化十二年成就を年久しければその間にハ異議有ものありいかある人事に幹たりしや聞まほし一石南塘と唐人の兵書に塘報の字あり久しく疑をきしに宋神宗諭邊將詔河朔地勢坦平畧無險阻殆非前世之比惟塘水實爲礎塞卿等

當體朕意協增脩云々是らに依てみれハ塘ある所に軍兵を留置其所よりの注進をさして塘報といふまや

一本朝通鑑慶長九年二月 台徳公命東海東山北陸三道郡吏每一里築塚至五月成とあり今の白川近邊の一里塚も彦の時築立たるものか  
一おなし書に慶長十一年十二月 神君禁闔國用永樂通寶錢先是永樂錢當常四  
造せし事もあれハ専ら世に行れたるなるへし  
一まこと永祿七年織田信長移居稻葉山改名岐阜采用周之岐山魯之曲阜とあり

一足利將軍義秋公近江へ落行し時湖上に泛ひ舟中の詩に落魄江湖暗結愁孤舟一夜思悠々天公亦慰吾生否月白蘆花淺水秋この風調明の建文帝の詩に似たり貴介の人落ふれたる氣象如此ものよや  
一明和九年江戸大火の時岡崎侯本多君馬上よて大手より平川御門へ乗ぬけ給へはいつれの御門にてやこゝは下馬あり何とて乗馬にて



通らるゝやと咎たれハ御普代の大名變事の時き御城内いつ方にて  
も乗馬いたさゝる地ふし馬鹿をいはず疾御門をひらけと聲高く  
叱りて通り給ひぬそのとき御年十七よいませしとそ英才おもふへ  
し惜哉十九歳にて下世し給ひぬ終焉の時きも御親屬を招き給ひ當  
家は格別の家からなれば何とそ中興と志さしたるかはや相果ると  
仰られしよし 老公の御をなして承りぬ

一鎌倉物語に上杉憲實鎌倉を出る夜月明なりければ當家の氏神春日  
大明神わか行末を守らせ給ふよと悦ひたることによりて見れハ越  
後の春日山の名も上杉家世々の居城なれば氏神の社ありし故なる  
へし同國高田も春日山より移りし御城故春日を氏神とす我藩かの  
高田に生れしものハ白川へ移りしに春日の社なけれハ白川愛宕町  
に春日を勸請せしなり上杉家の氏神たりしより越後に生るゝもの  
ハ何の姓氏によらず氏神とし夫より今又白川へ轉して後新らたに  
春日を勸請しけれハ町家にても春日を氏神とする所も有あり

一よき事はかり初にもきゝたきといふ因に加州の儒臣大嶋忠藏かあ  
たりしハ加藩の醫官何某宅よて論語の以禮讓治邦何有といふ所の  
講釋を火の番の何某きゝゝゝあしよその中ほにて本郷春木町より失火  
あり火の番勤むるものは常に火事装束し家來までも疹の装束をし  
て待ち如くなれば失火といひもあへすたゝちはその講席を去て乗  
出し速に火にかゝり消留て手柄もありしに御茶の水の十人火消の  
御人數も参りあひて打けしぬ火事すみて後消口の論こもゝゝおこ  
らんとするを彼士は衆を制していへらく春木町はわか藩邸にちか  
ければ私よ人數を出せしありもとより公務の事にあらす御火消の  
人々は專一の勤仕の事ありいかて消口のことゝも論すべきよ非す  
といたく示して火事場目付よまゝゝと斷り申述て直よ人數を引  
まよひあへりけり歸途なゝちよ醫師の家へ行て此まで學問をせさ  
りしことを今更ふかく悔ひおもひぬ今日足下の講釋に禮讓の事を  
きゝし故消口の論にて属役とも 公義の御人數と口論せんとせし

をゆにこゝそとおもひて皆制して退きぬ全く講釋の大庇にて予過  
あく君の御名を汚さす此恩顧少あからすと厚く禮辭を述へてせられ  
より學問に志ふかくありしとそ此始末をくれて見へけるよや御目  
付衆も感し給ひて再ひ姓名をきかれしとそ  
一松前の富山泉の碑文をそのまゝ寫しぬ石の高サ三尺六寸横一尺六  
寸なり○粹弓やしまの外までもてらします御代の光いたらぬくま  
なく暇夷のしま人をさへなてやせんせらるへきよしをきてさせ給  
へるはつきて享和二とせ箱館にはしめて政所をまうけられ筑前守  
藤原安福朝臣と正養とをしてかはるゝそこをほもらせらるかく  
て政所より諸士の官舎にいたるはてことゝく造營なりて後井を  
ほらんとするにこゝハ海岸にそひたる山陰なれはいはほおはいに  
してうかつへきよしなくからうしてひとつ掘得つれどもあはたの  
官舎の用ゆるにたらす是そ上下の愁ひなりけるまかるに被接の官  
人おほき中に富山三十郎保高といへるあわきてこれをうれふる事

せちありしほとよある日蝦蹙の山にひより清水流れ出るをとり出  
てとみよあり試みしよその性清淨にしてあちまひもまよ甘美あり  
つるに岩間をうかちてあまたの楓してこれをひくに政所をばしめ  
もろゝの官舎よもひきて猶あまより有いてや水の五行のひとつに  
してまはらくもかくべからざるもの也そ保高か功おほひなりと  
いふへしかるがゆへに此みおもとを富山泉となつくるものなり  
くみそめし泉とよにいさほしのせの名もつきぬ世々よつたへん

文化三年二月日安藝守藤原正養誌屋代太郎源弘賢書并題額

一おろしや國の錢貨なりとて中嶋爲吉の持來りしを寫し置ぬ質ハ唐

真鍮に似たる

色なり今一枚

の物ハ勤番日

記の中に志る

しぬ



一奥州平泉の近所の村々よては豊作のどしは色々化物の形を作り頭  
はいたゝきおとりて念佛を唱ふる事ありタカタテソツケといふ是  
は高館にて康衡滅亡の前いろくもの、け出て變怪多かりしと  
いひ傳ふか其姿今に残りしかと大關順庵衣かありぬ

一大社大寺ハ國々にて領主の命をも用ひず跋扈する舊習也仙臺の鹽  
籠明神ハ大社にて寛政の末に神主と社僧と口論の出入有しに侯家  
にて十分の御裁許あり其後聞しに鹽釜明神の御祈禱の札を 公義  
へ奉り給ふにハ神主松平陸奥守とかきて奉り給ふとそすへて神主  
社僧ハ 公邊へ訟訴する事かあそす皆仙臺侯にて御捌ありこれら  
ハ政宗公の卓識より出るなりと順庵衣かある

一朝鮮の事かきたるものに毛利秀包白川と襄陽にありといふ所は白  
川ニハイセント假名付て有し

一武邊咄といふ書に中村式部少輔一氏の家來成合平左衛門尉利忠は  
泉州小木川にて一番鎗して豊太閤より御感狀賜はりぬかゝる功は

れと一氏よりは只三百石よて召仕はれぬその、ち木村伊勢守へ出  
たるに成合は隠れなき勇士なればとて三萬石を賜はり佐沼の城を  
預けらる木村身上果て又一氏方へもとりそのときは三千石よあり  
ぬ關ヶ原御陳九月十四日株瀬河にて中村一學と石田治部の方と戦  
ひのとき成合平右衛門朱の牛の舌の指物よて一番鎗をして討死を  
成合か首を石田の家臣猪尾甚大夫討取りてけりその後黒田長政公  
聞及て猪尾を千石にてかゝへ足輕二十人預け置れしか成合か首取  
たるといふ事きかれて成合は天下に隠れあき勇士なり其首取たる  
ものに小知はいかゝと三千石やりて足輕三十人預けられしと見へ  
たり成合の山中の城のり等の事は世に聞へたれとかほどに詳かな  
る事は初て見たり我親族成合又大夫の先祖なればいどうれしくて  
こゝにしるす

一われ昌平坂御學問所にありし時佐久間某とて山鹿流の軍學する人  
のもとにて山鹿甚五右衛門已か終身の事書たる冊子に東海道にて

名將といはれたる松平越中守殿へ被召と自負してかき置ぬ又金玉詞林といふ書にハ並木道仁もとは惣内といひて太田三樂方にて二十一二の時入札よて侍大將となりさいはい許し給ふほどの人なり春日左衛門別て念比にて松平越中守殿へも呼給ふと見へたり此等によりてみればわか 國祖神公ハ名士をまねき給ひ材を愛し給ひぬまた名士才士も 御懇遇を榮とせし事顯然なり

一金玉詞林に一族とハ吾父高祖曾祖祖父子孫曾孫玄孫一類とハ弟甥從弟伯父又從弟忌のゝる分一家とハ遠くとも同名の分一門とハ近とも他名を名乗分とありよく分明に解したり人々わきまへ置へし

一帯刀先生といふ事塙檢校に問しに帯刀の長を申也近衛の番長をも先生と申しぬ同列の中よて頭立さるものをいふと答へぬ

一國書のうちに耶等とて臣下をさしたる語ありふと心とむれば分かつたき字面なり耶從等といふ字面によりて考ふれば朝廷にて羽林の

軍をおかれしより將軍ハ羽林郎を被官として臣僕のことくつかひし故なるへし

一本朝にて刀劍にさめを装とする事唐を襲ひしにや白樂天の詩よ刀劍鰐魚鱗といふ句あり

一卑幼の人尊長に答ふる辭にアイといふ日々にいひて其文字を去るものなし韓文の遠游聯句よ猥歎の字あり注に王逸曰歎歎也方言曰歎然也南楚凡言然曰歎とあるを以て平日のアイの字ハ歎なる事を知りぬ又人を叱る時發語よヤイといふ喉の字なるへし史記項羽本紀亞父曰喉豎子不足與謀と有是なりヤイノ反ヘイ也人を叱るにイイといふも亦此喉の字にや

一本朝のむろし人の名雅馴にして多く古語を取たるもの也武家に成ても出處正しき物とおほゆ韓文唐故朝散大夫越州刺史薛公墓誌に公宜有後有二稚子其祐成之公食廟祀とあり二の稚子といひて祐成といふる彼曾我十郎の名此語をとりしにやふさりの稚子成し事も

此文と能事實をおかしふすといふへし  
一高内又七松山藩の人代官職を務早魁の時一人の考を以て稻の根を  
縦横に鎌を以てうかち夜露を含ましむ地柔にして露多ければ十日  
ほどへて自然と稻に生色を存して雨のふるまてたもちよりしより  
伊豫よてハ今に早年にハ必このわさを行ふと高橋善次かいひぬ  
一いにしへ何々保とて郡又ハ庄とおかし様に地は名つく事誰も志る  
事なり郡司庄司の名は昔くしれり東寺の百合文書の内に治承二年  
ハ保司源の何某と志るしたり保司の名ある事始てまりぬ今に保の  
名残りたる地所々ハあり或ハ保を轉して何々尾と呼ぶ所あり是も  
保なるへし  
一流行病の時人の名を門へ張てよけどする事世間の習あり唐にても  
あり小倉山房集陳鵬年傳に蘇大疫公所疫斷民書公名鎮于門とあり  
今大般若の札をばるも鎮といふへし記事をかく人心得をくべきあ  
り

一淺草觀音の境内に久米の平内左衛門といふ石像あり實に國初の御  
旗本鈴木正三といふ人也正三法躰の後武者坐禪時の聲坐禪といふ  
事を工夫して坐禪せられしかその像なりといふ正三年わかき時  
神祖にしたかひ奉りて百戦の功ありその後願もなく三河よて鬻を  
切て僧となりぬ組頭より願なくして出家せし事不束なりとどかめ  
られけれハ予今世の事十分に勤たればこれより後世の事しるへき  
爲にかくはなれりといふ頭きゝてけにさる事なれど家督等の事も  
あるものなりといはれければ正三また答ふるハ私事數度の功あり  
て御目鑑をもて千石賜りぬ世悴はいか程にて俸祿相應すへきやわ  
ればとさまへすされば家督も願はす是も上の御目かねにていかは  
となりとも賜はるへしといひて去りぬいかにも不束なる事なれば  
出奔といふ名目にあたらん家斷絶すへきなど評義ある事 台徳公  
きとしめし給ひていやく出奔とはいふへからす是等は遁世とい  
ふものなりと仰せありて俸祿相違なく玉りぬ今駿河臺に鈴木何某

と云ふは其孫齋あり正三法鉢の後江戸へ下るとて箱根山を越ゆる時盜賊出て錢をおきてゆけといひかけたりしに予錢あしと答ふ賊さらば衣服をといふ安き事よとてたゞちよ衣服と帯とを投出し襦半と下帯はくれよといふ賊その品はやるへしといへば正三かゝる体にて大手を振て去る心あき賊も衣類を惜ますなけ出したるさまはいかよも懲をばあれし心成べしあれと考賊の出家といふへしとて丹心に感してかゝる出家の物奪ひとるハ淺ましとおもひまづらふうち正三また立かへり今おもひ出せハ下帯に金一步ありしとて投出してとく行ぬ賊いよゝゝ恐感しけん其金と衣を持てあとより追かけ小田原邊にてやうゝゝ追つきて衣金をあへしあたへんとさし出せハ汝らこときものゝ手にふれしもの再ひきるへきやんとて聊も顧みず賊一言の答へもなく一念發起せしとて平伏したれはいやゝゝまだ早しもそつと惡事もしむまき物も十分にくらへ其後の事といふれけれハもハや如此とて元どり切てゐたれハさらハ

とて同道して江戸へともかひ出ぬその賊惠中といひて正三の法脈をつきたり正三一名ハ石平道人ともいふ二人法師の類三四部著述あり惠中も著述あり石平道行形記といふものもかきぬ今服部坂に正三堂といひ傳ふ所ハ惠中も住し所ありと考正三の禪味は端的に武士の覺悟生死の所悟入すへき方便なりといふある士正三の法語をきゝて大坂陣の時塀下へ落たりしを敵鎗にて突く其志は首を下より取てしかとよぎりゐさりし事おもひ出ぬ考の時の心死生をわすれ大丈夫なりと存候らひし今御咄にて恩ひ出たりと申けれハ正三それ考とあり貴丈ハ常にそこを忘れぬたり我ハ常にそこをわすれぬばかりと答へたりとありある時眞言宗の僧何やら經文の事他言よいひゐたるを正三見て僧は經文のみせんさくするより生死の覺悟專要ありといひしかハ僧それハ早とく覺悟極めしと答しかさらハ打殺してまいらせんといひあから有あふ柱とき材木をとり持て打かゝれハ僧あやほり入しとて平伏しからうして詫言いひつく

羨

るひぬ誠に快活の禪味ありと平山子龍かたりぬ  
 一文政二年大銃炸裂して青木左織火毒のため終に死たりその後大  
 やけどの薬を心得あるへきと思ふ人にも問ひ試みしにやけどの火  
 毒をさるにかゝこれの療治あやまりぬ三四夜も過れぬ火毒の外に  
 して只脱疽の療治をさるか第一なりと南部伯民かいひぬ  
 一本邦にて七夕は兒女子色紙短冊の間ひやうさんの形の紙をも付て  
 歌をかきて竹に結ひ付る事唐山を學ひたるあるへし福建通志土風  
 の部河州府の下に社學小生清晨歌詩擊鼓竹懸紙胡盧藏所習課紙焚  
 郊外謂之乞功とあり  
 一さゝかしの事も同書風俗那武府の下に七夕女兒以織縛層樓飾綵紙  
 繪牛女於其上中蓄嚙子一枚置庭中祀之瞻拜乞巧若幘子結綱謂之得  
 巧  
 一阿部宗平といふ針醫石坂宗哲殿より代脈にわか宅へ來りぬもとは  
 白石の家頼ありしか故ありて浪人とあり石坂の中間奉公にすみて

それより針治を習ひ覺へしといふ依て片倉の家ハ代々勝れたる賢  
 大夫ときゝぬいかゝやと問ひしよ三四代先きに雪山といひし小十  
 郎は名譽あるものなり君侯御家老の家へ御立寄といへば元より珍  
 味を設て御興をそふ事なるかゝの小十郎は御立寄のとき赤豆飯を  
 奉りてさして御馳走なかりし候御歸館の後御禮と御機嫌伺は罷出  
 て御側の伊達藤五郎へ面會しそのとき今日の御馳走ふりを御前よ  
 て御はあしはなきやと伺ひければゆよその事なり小十郎今日のも  
 てあしは在郷風なりとて御不機嫌にましゝぬと答へたれば小十郎  
 危坐して申けるは御先祖政宗公仙道人取橋にて上杉と御合戦のと  
 きわか先祖一人御供仕り手いたなき御働よて候き其時殊の外御空腹  
 よて御難儀にいませば小十郎かたへの百姓屋へ行所望して赤豆飯  
 を奉りぬ君臣ともに如此御艱苦をへてかゝる大國を御たもち被遊  
 し事なりされぬ君侯の御馳走にハ赤豆飯程のものはあるましきと  
 心得て奉りぬと言葉正しく申ければ藤五郎御前へ出てまつ直よし



かゝと申上ければ君侯けにもくわれ心得違なりむかしを忘  
し事面目なきとて速に小十郎に逢玉ひ過ちを謝し給ひければわか  
素心御心よかなひしとて小十郎いとくよろこひ萬歳をとなへて  
退出せしとぞ

法林寺書牘

上畧大山崎の廣前伏拜し一里計り行てつらくおもふよう彼金龍  
櫻のもと所をし問はやと道への家へ立寄此何なりに金龍寺てふ寺  
やあるさらばおのれよ教て得させよといひたりければ家の主云よ  
ふきんりふ寺てふ寺この四五里のはとにあしきん龍とはいかに書  
候そとおのれ金龍寺の文字ありといへばあるし其はきんりう寺に  
てあらすこん龍寺にて候此海道より右のかたへ十八丁入てあま村  
と云あり金龍寺もあま村の内ありとて委しく教へければおのれ右  
の道ゆく程なく山路へかゝりぬもとに大道あり丹波海道なり此廣  
き道横切山中へまけ入いとさひしき道にてかささら山櫻あまた

ありて惣門にいたる攝相大畧と書たる碑あり寺院清静にして天台  
律寺あり観音堂の前櫻數株あり庫裡へ立寄我ハ諸國一見の僧にて  
候久々桑名の照源精舎に錫をとめて候こたひ思ひ立此津の國一  
見せばやと存候抑かの照源精舎よ今ある所の櫻をきん龍櫻と名付  
ていにしへ桑名のあるし櫻を此寺より移し植てみよあふめてられ  
候しか今にいたりもとせあまりあふ八十ちのとしを経てあむ色  
よき花の白にて春ことば咲出て花の名も金龍櫻と申候あり然るに  
此寺の櫻の名いかにとあへいかなる故よしにか候こふらくハ詳  
はらよきこへさせ候へ其時あるしのひちり香の衣に香のけさかけ  
六字寶號とあへつゝすゝつまくり立出如意をあけて日旅僧間花花  
知汝哉汝知花哉我荅曰歳々年々人不同时よ主僧實よ忠のりかむか  
しなからの山櫻哉と云しもうべある哉と云て合掌し十念しければ  
我亦合掌十念せり主僧云此寺の櫻古くよりありてむかし  
東照宮世にいませし時櫻を奉りしより當寺へ三拾石の寺領を給ふ

今に退轉なし其櫻ハ不賢像櫻なり今此寺の庭ヨ一株あり伊勢櫻二  
三本あり餘ハ山櫻なりきんりう櫻といふはしらすはたとハ嶋上  
郡ヨして安満村の内なり古曾部村といふハ是より七八丁下の村な  
り攝州の内ハ古曾部郡といふハなし一村の名なりまた當寺に古記  
もあらざれば古へ桑名侯へ櫻の木まいらせし事も曾て不知今始て  
聞りと下畧

神無月五日

通 阿

志からみ終

- 一月費未タ拂込マサル各位ハ至急拂込ムヘシ
- 一月費拂込サレハ遺書ノ發送ヲ停止スヘシ
- 一月費郵券代用ハ一割増ノ
- 一月費拂込ハ發行所内星野恭藏宛ノ
- 一前修遺書刊行ノ順序ハ本所採集ノ便利上完成ノ者  
ヨリ着手スヘシ

三重縣伊勢國桑名町大字矢田川原百六拾九番地

全 發行所 桑名前修遺書編纂取扱所

三重縣伊勢國桑名町大字内堀六拾番地

星野恭藏

明治廿五年五月十一日印刷

編輯兼印刷人

佐治爲善

三重縣伊勢國桑名町大字矢田川原百六十九番地

明治廿五年五月十五日出版

同

星野恭藏

三重縣伊勢國桑名町大字内堀九十六番地

印刷所

育文舎

(非賣品)

